



174号

2012/6/1

日中文化交流市民サークル‘わんりい’

東京都町田市能ヶ谷7-32-12 田井方

〒195-0053 TEL&FAX:042-734-5100

<http://wanli-san.com/>

Eメール: wanli@jcom.home.ne.jp

◆‘わんりい’ HPのアドレスが上記になりました。



「朝のひとつき」(陝西省伏羲河村にて) 2001年10月

撮影 木村武司

‘わんりい’ 174号の主な目次

北京雑感(65)住宅の改造、仕上げは「木地板」……………2
私の調べた諺・慣用句10「鶏群の一鶴」……………3
媛媛讲故事(44)「寶娥の冤罪Ⅲ」……………4
中国-城市めぐり(16)「瀋陽」そのⅡ……………6
四姑娘山写真だより27女王谷の梨の花……………8
山西省あちらこちら(番外)五台山ハイキング ……10
アフリカの日々(63)「カムーニャの食欲」……………12
スリランカ紹介(58)「困われ料理人」……………13
松本杏花さんの俳句集「千里同風」より……………14
アジア映画鑑賞 ①シンガポール映画……………15
読む(85)「中国が笑う日本の資本主義」……………16
‘わんりい’ 掲示板……………16・17・18

【表紙写真説明】

陝西省伏羲河村に到着した日は、村長さんのご自宅である窑洞の一部を私達のために開放して頂き、オンドルの上でその夜は寝ました。翌朝、一日2食の土地柄であることから、また朝食まではまだ時間がたっぷりあるためお腹を空かして、朝の風景を撮影しに行った際の写真です。

朝靄が少しかかる窑洞のある朝の風景に、天秤棒で荷物を運んできたご主人を奥さんが迎える様な朝の風景。そしてその家で飼っている牛がくつろぎ、鶏がせわしそうに遊び回る朝の風景に、都会にはない風景と人間と動物とが織りなす幸せな自然との営みを感じさせられました。
(木村武司)



木地板とは、いわゆるフローリングのことですが、今回お話を当たって、辞書を調べたら、「木地板」と言う言葉は載っていませんでした。「地板」で「床板、板張りの床」と言う意味があって、「木」はつけなくても良いようですが、北京の人々は、「木地板」と言い習わしています。

21世紀に入った頃から、北京の住宅では改築ブームが始まりました。北京市内のマンション建設は始まったばかりで、売り出し件数も少なかったため、経済発展に伴って生活水準が向上した人々の中で、今住んでいる場所に満足している住宅所有者は、先ず住宅の改造を始めました。

第一に始めたのが、窓をアルミサッシに替えることでした。私が初めて北京に住み始めたのは、半年以上留守にして北京に帰宅する方と一緒に、そのお宅に「帰って行った」時からでしたが、その家の中はあらゆる家具調度の上に薄らとごく細かい砂埃が積もっていました。とても1年足らず留守にしただけのお家の様には見えませんでした。日本だったら、4～5年も留守にしないと見られないような光景でした。帰宅が春先で、黄砂が吹き荒れた直後だったせいもあるのでしょうか、締め切った窓から入った砂埃の量としては驚異的でした。

この砂埃に北京の皆さんは困っていたようで、アルミサッシに替える家が出始めました。私が住み始めた友人の家は、古いレンガ造りの5階建てで、建物に3つの階段入口があり、その階段の両側に一戸ずつ家が配置された、日本の公団住宅と同じような構造でした。その階段入口を「单元」と呼んでいます。部屋番号は、階段を上って左側が1、右側が2ですから、1号棟1单元の階段を上って2階の左側の家は、1号棟1单元201号となるのです。1单元は10戸からなり、この棟は3单元ありますから、合計で30戸です。2000年当時、アルミサッシの窓をつけた家は3軒だけでしたが、1年足らずの間に20軒以上のお宅がアルミサッシに替えました。

アルミサッシの窓枠は白いので、散歩などで表へ出た時、昨日まで鉄の窓枠だったお宅の窓に白い枠が見えると、「あ、あのお宅もアルミサッシに替えたのだ」とすぐわかるのです。先に取り換えたお宅から、具合がいいと聞くと、「それではうちでも」と言うことになり、連鎖反応が起こったようです。

窓が一段落すると、防犯ドアファンの設置です。これは「防盜門ダオメン」と言って、全面鋼鉄で出来ていて、外側にはドア

ノブが無いものです。鍵も2種類ついていて、見るからに頑丈なものです。これは、散歩の途中に外から見て分かる変化ではありませんが、「あの家もつけた」、「この家もつけた」と言う話を聞くと、瞬く間に普及した様子が見てとれました。

そして最後に、板張りの床の設置です。これは工事がかなり大がかりで、大きな音がするので、单元内の工事はすぐわかります。日本のように、上下のお宅に工事開始の挨拶をするわけではなく、ある日突然に床のタイルをはがす大きな音がして、「あ、上のお宅が工事を始めた」とか、「下の家の工事が始まった」とか知るわけです。今までタイル張りだった部分は、小型の削岩機のような機械でコンクリートをむき出しにして、その上に板を張っていくのですが、コンクリートの上に直接板を敷き並べていくのにちょっと違和感を覚えました。床張りのことはよく分かりませんが、日本だったら、根太と言うのでしょうか、床板を支える横木を渡して、その上に床板を並べると思うのですが、北京では、床板を直接コンクリートの上に並べていました。湿気の少ない北京だから許される工法なのかもしれないと、勝手に解釈しています。

この工事は、施工するお宅が先ず大変です。工事を始める部屋の家具を運び出したり、スペースにゆとりの無い時は、部屋の片隅に寄せて、空いた隅から工事を始めます。家具の移動は、工事をする人たちがやってくれますが、工事の期間中は何かと不便で落ち着きません。また、隣近所のお宅は、ある日突然に大きな音がして工事開始を知らされます。朝は7時ごろから工事が始まります。日本では、朝7時の工事開始はとても許されそうにありませんが、北京の人たちは寛容です。その代り、12時から14時の間に大きな音をたてると、鋭い批判を浴びます。この時間はお昼寝の時間で、静かにしなければなりません。北京の人々にとって、昼寝の習慣は絶対的なものなのです。

アルミサッシで砂埃を遮断し、「防盜門」で犯罪から身を守り、温もりのある「木地板」の部屋で、靴を脱いで室内履きで生活するのはとても快適だと皆さんおっしゃいます。しかし、今まで室内で靴を脱ぐ習慣がなく、ドアを開けると同一平面の床が奥まで続く北京の住宅では、靴を履き替える場所がはっきり決められません。これがどのようになるかは住む人の工夫次第。北京の人々のお手並み拝見と行きましょう。

鶏群の一鶴

私の調べた諺・慣用句 10

三澤
統

とある地方に近隣の農家の子供たちが通う中学校がありました。或る年、2学期の始まる日に都市からの転校生がおりました。名前はT男です。クラスの生徒たちはそのT男を一目見てびっくりしました。身長は群を抜き姿勢良く、体つきもがっちりしています。真っ白いワイシャツに折り目の効いたズボン、頭は坊ちゃん狩りで、顔は眉も濃く知的的で、意思の強そうな感じです。更に聞けば成績優秀、運動も万能でテニスの県

大会での優勝経験もあるとのこと。

丸刈りで日焼けし、どんぐりの背比べのようなクラスの子供たちは、あんぐり口をあけてT男を見ているだけでした。このような場面でのT男は正に「鶏群の一鶴」と言えるでしょう。

辞書では、

▲現代国語(三省堂):「鶏群の一鶴 ニワトリの群れの中の一羽のツルのように、おおぜいの凡人の中に、ひとりだけまじっている、すぐれた人」

▲中日辞典(小学館):「鶴立鸡群(hè lì jī qún)凡人たちの中で一人だけが際立って優れているたとえ。鶏群の一鶴」

と、それぞれ記されています。

この成語の出自は「世説新語^{注1)}」の、「有人語王戎曰，“稽延祖卓卓野鶴之在鸡群。”答曰“君未见其父耳”」の部分です。

(有る人が王戎^{おうじゆう}に告げて言うには「稽延祖(稽紹のこと)は、背も高くさっそうとしていて、あたかも鶏の群れの中に一匹の野鶴が舞い降りたようでした」王戎が答えて言う“それは君が稽延祖の父(稽康)を見たことがないからだよ”)



今回のテーマである「鶏群の一鶴」という言葉はここから出たのですが、これで見ると稽延祖(稽紹)は父親ほどの器量は無かったのかもしれない。しかし、後に出世をして時の皇帝

の恵帝によく仕えたため、皇帝からその忠義を大変賞賛されました。それでは詳しく見てゆきましょう。

稽康は三国時代の著名な文学家で、音楽家でもあり、竹林の七賢人^{注2)}の一人でした。気性強直、才気煥発、気力充満、才能豊富、体躯堂々の人物で、衆人の注目するところでありました。しかし、朝廷政治に不満を持っていたため、後に殺害されてしまいました。享年はわずか41才でした。

稽康の子稽紹は、父親同様に体つきは堂々として大きく、立派な容貌をしておりました。その上學問も秀でておりましたのでどこに居てもひととき目立つ存在でした。

西晋の初代皇帝司馬炎(後の武帝)は魏から禅譲を受けて帝位についた後、晋を建国し、稽紹は晋の都洛陽に召され役人になりました。

ある人が彼を見たあとで、彼の父親の友人で七賢人の一人の王戎に言いました。

「昨日私ははじめて稽紹を見ましたが、彼は、体格も立派で、背も高く人々の鶏の群れの中の鶴のようで、大勢の人から大変注目されておりました」

王戎はそれを聞いて言いました。

「君はかれの父の稽康を見ていないから、そう言うのだよ。稽康は稽紹にくらべたらもっと衆に抜きん出



イラスト：叶霖(Ye Lin)

ていたものだよ」

司馬炎の子司馬衷が帝位を継いで、晋の恵帝となりました。稽紹は侍中に任ぜられ、皇帝に付きしたがって宮廷に出入りしました。“八王の乱^{注3)}”の折には稽紹は皇帝の出兵作戦に随行し、恵帝の身の回りの世話をしているときに、不幸にも矢が当たって帝の側に倒れ、鮮血が恵帝の軍衣の上に滴り落ちました。恵帝は稽紹の忠心に大変感動を受けて、近侍たちに「これは稽紹の忠義の血である、軍衣の上の血痕を洗い落とさないように」と指示しました。

恵帝は稽紹の日頃の忠節を大変賞賛し、心から稽紹の死を惜しみました。

〈注記〉

- 1)『^{せせつしんご}世説新語』：中国南北朝の宋の劉義慶が編纂した、後漢末から東晋までの著名人の逸話を集めた小説集。
- 2)『^{ちくりん しちげん}竹林の七賢』：3世紀の中国・魏(三国時代)の時代末期に、酒を飲み清談をして交遊したと伝えられる、下記の七人の称。^{げんせき}阮籍、^{けいこう}嵇康、^{さんとう}山濤、^{りゅうれい}劉伶、^{げんかん}阮咸、^{しょうしゅう}向秀、^{おうじゅう}王戎
- 3)『^{はちおう}八王の乱』：中国の王朝晋(西晋)の滅亡のきっかけを作った皇族同士の内乱である。晋により、中国は100年に渡る三国時代に終止符を打って全土が統一されたが、その平和は僅か数十年で崩れ去り、この後中国は隋が統一するまでのおよそ300年にわたり、再び動乱の時代となる。八王の乱の流れはとても複雑であるが、端的に言えば十の事件(クーデター・内戦・市街戦)を総称して八王の乱という。

(ウィキペディアより抜粋)

この物語の頃(元代の初め)、死刑を執行する時刻は、正午でした。翌日、いよいよ正午近くなり処刑場の広場は処刑を見物しようという人でいっぱいでした。季節は6月で、汗ばむような陽気でした。

正午の鐘が響き、牢の門が開けられ、紅い囚服を着せられた寶娥が警備の兵士たちに囲まれて門から出て来ました。刑執行監督人や首を切る刀を担いだ死刑執行人が其の後に続きます。寶娥の事件は、すでに町中の話題をさらっていましたので、その話題の人物を一目でも自分の目で見ようという人々で寶娥の周りはぎっしりと囲まれてしまいました。

寶娥は、死刑の判決が下された知らせを前日に聞かされ、心は深い悲しみで張り裂けそうでした。そして広場に連れ出された寶娥は心の中で叫んでいました。

「何故自分のようなか弱いものがでっち上げられた罪名を負わなければならないのですか？ この世の正義はどこにあるのですか？ 善には善の報いがあり、悪には悪の報いがあると言われていたではありませんか？ 役人たちはどうして本当の殺人犯をとらえようとしないのですか？ どうして正しい事と間違っていることを見極めようとしないのですか？ これらも

ろもろのことを私はどう考えればよいのですか」

兵士たちはやっとのことで、寶娥を刑場の中ほどへ連れて来ました。処刑の場所には蓆が敷かれていました。当時、棺桶を買えないような貧しい人々は蓆で巻かれてそのまま埋葬されたのです。

蔡婆が寶娥の前に来ました。二人は抱き合うと言葉なく泣き崩れました。しかし、寶娥は気を取り直し、顔を上げて周囲を見渡しました。なんと大勢の人が自分を見つめているのでしょうか。寶娥は、自分の心の中にわだかまる疑問を広場に集まった人々に聞いて貰いたいという衝動に突き動かされ、大きな声で叫び始めました。

「皆さん私は冤罪です。でたらめな裁判で処刑されるのです！ 私は人を毒殺などしていません！ 本当の殺人犯は私ではありません！ あの無頼漢です！」

元々、町の人々は蔡婆と寶娥は人柄がとても良いと知っています。寶娥が叫ぶ声を聞いた人々は議論し始めました。

「そうだ。寶娥は決して人を殺すような人間ではない」

「真相がまだはっきりしていないのに急いで刑を執行するというのは可笑しい」

「裁判官はきっと大金を貰ったに違いない」

刑執行監督人は寶娥が大声で見物人に呼び掛けるのを聞くと慌てて止めようと

「さあ、刑執行の時刻になるぞ！ 余計な話はするな！ 言いたいことはさっさと見え！」

と言いました。

寶娥は暫く考えてから話し始めました。

「私はもう死ななければならぬようです。しかし、私が死んだら三つのことが起るかもしれません。この三つの出来事が起ったら私が冤罪だという証明だと思ってください」

「なんだと。その三つの出来事とはなんだ。早く言ってみろ！」

監督は寶娥に三つの出来事を話すように促しました。

寶娥は話し始めました。

「私の傍に白い絹を一枚広げてください」

「なんで白い絹をひろげるのか？」

と監督が訊きました。

「私の首が切られて落ちてても血は一滴もこの蓆には落ちないで、全部白い絹に吹き掛かるでしょう。それが冤罪の一つ証明です」

寶娥が答えました。

「でたらめな話をするな！が、白い絹を用意するなど難しい事ではないから、本当かどうかは別にして、白い絹は用意してやろう！」

監督が命じました。

「で、次は？」

「次は、私が死んだら、今は6月ですがきっと雪が降ると思います。雪が降れば、私が冤罪である二つ目の証明と思ってください」

「冗談を言うな！こんな汗ばむような暑い季節に雪が降るなんてことがあるか！」

寶娥は顔を天に向けて大きな声で叫び始めました。

「神様、私は人を殺していません。私を憐れむなら、雪を降らせてください」

「さあ、三番目を早く見え！もう時間がないぞ！」

「昔、東海地方で大層親孝行な娘が冤罪で処刑されたことがありましたが、その地方はその後3年間旱魃が続いたということがありました。私が処刑さ

れたら、こちらも3年間は雨が降らないでしょう。それは私が無実の罪を着せられて処刑されたことを神様が怒っている証明なのです」

監督は

「でたらめな話はもう結構だ！刑を執行しろ！」

と命令を下しました。

死刑執行人はその命令を聞いて、寶娥に向かって歩いて行きました。とその時、突然強風が吹き始め、先程まで晴れ渡っていた天空の四方八方から黒い雲が湧いて、見る見るうちに空を覆いました。

寶娥は大きな声で笑いました。

「皆さん、見てください。私は無実です！神様が怒っているのです！」

執行人は寶娥の話が怖ろしく何も考えないようにして刀を素早く寶娥に振り下ろしました。刀が一瞬きらめくと寶娥の首が落ちました。が、不思議なことに、寶娥が言った通り、血はムシロに一滴も落ちず、傍らに広げた白い絹は血で真っ赤に染まりました。

続いて、天空の黒い雲はぐんぐんと広がって、間もなく、なんと雪がちらちら舞い下りて来たではありませんか。

人々は言葉なく呆然と、先ほどまで光り輝いていた6月の景色が雪景色に変わって行くのを見ているばかりでした。広場はしんとして物音一つも聞こえなくなりました。

その後、寶娥の物語は町中で秘かに伝わり、老人から子供まで誰でもが知る話になりました。

そして寶娥が予言したとおり、この山陽地方では、三年間、一滴の雨も降りませんでした。農作物は育たず飢饉となり、人々の生活は苦しくなる一方で、餓死する人や乞食になってあちこちへ逃れて行く人が大勢出ました。加えて窃盗事件や、金品を狙う殺人事件なども多発し、治安も大変悪くなっていました。

この三年間の山陽地方の状況は朝廷にまでも伝わることとなり、その事情を調べてみようとする天子の指示が降り、朝廷から秘密裏に一人の正義感溢れる役人が山陽地方へ派遣されました。この役人こそが正に15年前、都へ行って科挙試験を受けて合格し、出世した寶娥の父である寶天章でした。 (続く)

故宮を出て5～6分歩くと「張氏帥府博物館」の前に出る。ここは北方軍閥の首領であった張作霖とその息子の張学良の官邸兼私邸である。この2人について述べると、とても紙幅が足りないが、一言でいえば近代中国の寵児である。張作霖は、馬賊から一代で身を起し、1926年(昭和元年)には北京で軍事政権を樹立するに至る。しかし、1928年に北京から帰るときに、日本軍の仕掛けた爆薬により命を失った。日本軍は中国人のアヘン中毒者を犯人に仕立てるといった卑劣なことまで行った。瀋陽では近代に二つの有名な事件が発生している。

一つはこの「張作霖爆殺事件」であり、もう一つは1931年9月18日に瀋陽駅(当時奉天駅)の北東7kmのところの柳条湖で発生した事件である。ご承知のように関東軍が南満州鉄道の柳条湖付近の線路を爆破し、中国側の仕業だと喧伝した事件で、これが満州事変の引き金となったものである。そして翌1932年に満州国が建国され、日本は抜き差しならない状況に陥っていくわけである(前回の長春市で記載した年表を参照してください)。

こうしたことが続いたためであろうが、瀋陽は対日感情があまりよくない土地である。最近では尖閣諸島沖の中国漁船衝突事件が発生したとき、瀋陽や長春では反日デモが起きた。日本漁船が、中国の警備艇にわざとぶつけ、中国側が悪いと強弁すればいったいどんな騒ぎが起きるのであろうか。

この張氏帥府博物館であるが、私はこの建物の大きさとデザインに圧倒された。1922年に完成したこの建物は「大青楼」と呼ばれ、中華バロック様式の外観とガイドブックに出ている。中華バロック様式といわれて



張学良像

もよく分からないが、この3階建てとも4階建てとも思しき建物は、ベージュ色の外観で1階はギリシャの神殿に似た柱で2階のバルコニーを支えるようなデザインである。中国国内には他では見られない建物で、その前に立つと時代を超えて張作霖の意気込みが充分伝わってくる。

この博物館の入り口付近には、息子の張学良の等身大の銅像が帥府を守るように立っている。石の台座には張学良將軍と刻まれている。彼は蒋介石を軟禁するという西安事件(1936年)を起こし、抗日運動に身を捧げていくわけであるが、翌年蒋介石にとらえられた。そして幽閉されたまま中国各地を転々としたあと、台湾まで連行されていくが、時代が変わってもなぜか軟禁状態は続いた。1991年、彼が90歳の時開放され自由の身になったが、何ともひどい仕打ちではないか。半世紀以上も軟禁され続けたのである。開放された後はハワイに渡り2001年に逝去している。ちょうど100歳であった。国のために立ち上がった男にどうしてかくまで……と思うと深い同情を禁じ得ない。ついこのあいだの出来事である。

あちこち歩き廻ったので昼食をとりながら一休みする。友人が、

「近くに中街というにぎやかな通りがあり、そこには何でもある」

と言うのでそこに向かった。そしてここでは老辺餃子館という店が有名だとのことこの店に入った。2階に上がりドアをあけて入ると、大勢の人が食事をしている。

この店は1829年に創業というから、餃子ひとすじに180年余り続いていることになる。メニューを見



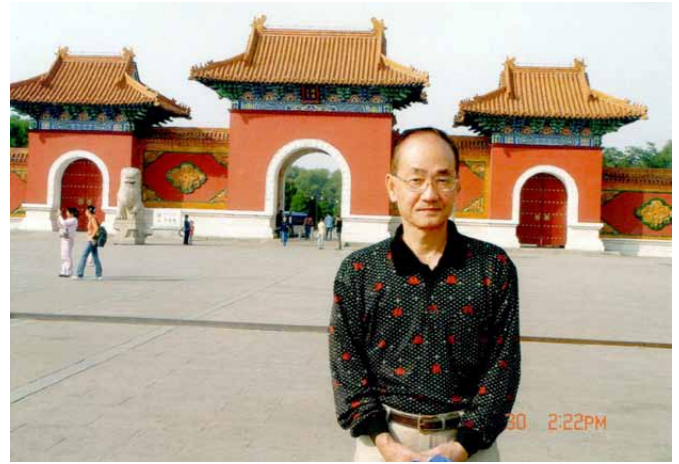
瀋陽中街



瀋陽中街

ると何と何十種類もの餃子のオンパレードである。中国はやはり蒸し餃子なので、二、三種類頼むと皿いっぱい盛られたのが来てとても食べきれない。そのうち男性従業員が各テーブルにお茶を注いでまわっている。見ると注ぎ口が1m半くらいの長さの如雨露に似た容器を肩の後ろから背負うようにして上手にこぼさないように湯呑についでいる。これを見るだけでも、来た甲斐があったと思った。食べ物の話になったので付け加えると、瀋陽駅から北東に2kmくらいのところにコリアンタウンがある。ハンガルの看板が軒を連ねており、この通りはどう見ても中国にいる感じではない。何でも1992年に中韓国交樹立を機に韓国の人が大勢住みつき、今では世界有数のコリアンタウンに変貌したようだ。瀋陽に到着した日の夕食はこの通りにあるコリアンレストランでビビンバとキムチ鍋に舌鼓を打った。

昼食後は「9.18 歴史博物館」を見ることにした。前述したように1931年のこの日関東軍は柳条湖の線路を爆破した。この事件が起きた場所に建てられたのがこの博物館である。巨大なカレンダーをイメージしたコンクリート製の建物には「9.18」という文字が彫り込まれている。この建物の横には新しい博物館があり、例によって江沢民が書いた文字が掲げられている。抗日教育に力を注いだ江沢民は、各地のこうした施設に必ずといってよい程、自筆の文字を掲げさせている。中に入ってみたが、これでもか、これでもかというくらい日本人として目を背けたくなる展示物でいっぱいであった。



昭陵入り口

本日の最後は「昭陵」である。ここは清朝第2代皇帝のホンタイジの陵墓である。市街地の北に位置するため北陵と呼ばれ、また娯楽施設も設置し、北陵公園として市民の憩いの場となっている。とにかく広大な敷地で入園券を買って中に入るとそこには10人乗りくらいの電気自動車乗り場がある。歩いても大したことはなかりとまっすぐ続く石置の道を歩くと、ようやくホンタイジの見上げるような銅像の前に来る。よろいを着たいかにも強そうな武将像である。

また歩き出すがなかなか目指す建物まで行けない。そのうち人工の大きな湖が現れそこに橋がかかっている。それを渡るとようやく昭陵の正門である隆恩門がある。その奥には四隅に、角楼という見張り台のような建物があり、荘厳な雰囲気醸し出していた。そして大きな建物の前に行き着く。その中でも墓があるのかと思っていると、その後ろに白い小山があり、それがホンタイジとその妃の墓ということが分かった。ちょうどおわんを伏せたような形である。ここに眠っているのかと手を合わせた。帰りは少し待って電気自動車に乗り込んだ。なお、初代皇帝のヌルハチの陵墓は福陵と呼ばれ、市の中心部から東の方角にある。清朝は3代目の順治帝から始まるが、3代目以降の皇帝の陵墓は、北京郊外の東陵と西陵に分かれて埋葬してある。

瀋陽は、まだ観光するところはたくさんあるが、今回の旅は三日目の午前中の五愛市場までとした。ここは日用品の卸売市場で安いので有名らしく、大連日通の社員は皆よく知っていた。中国語で卸売を意味する「批発店」という看板があちこちにある。私もシャツやベストを買ったが本当にビックリするくらい安く得をした気分となった。そして荷物を片手に大連に向かう「新空調軟座特快」に乗り込んだ。(終)



四姑娘山では3月に入っても未だ雪が時々降り、花が咲くには程遠いですが、女王谷（現在ギャロンと呼ばれる地域のチベット語の原名“rGyalmorong”の意識）の標高の低い地域では白い梨花が咲き始めます。今年の梨の開花時期は例年より10日位遅く、3月後半から4月初めに掛けて（高度や日当たりによって異なります）が盛りでした。簡単ですが、この写真をご紹介します。

写真上：大金川河岸に点在する集落の一つの風景です。新緑の芽吹きに先駆けて梨花が咲き揃い、村の人達はこの時期に畑を起し水を引きます。その耕された畑では、土の表面に出てきた虫をカササギの仲間（現地名の一つはゲデゲジ）が啄みます（写真中）。

写真下：山上の集落に有る梨と山桜の花は青い空に映えて綺麗です。背景に古代から女王谷の信仰の中心である尖ったギャルモ・モルド山4820mも見えます。山の名前は「女王の尖った岩」を意味します。

なお農業暦の春節に四川省奥地のチベット族自治区で治安問題が発生しましたが、四姑娘山や丹巴は平穏で既に一般の外国人が入れるようになっています。



●大川さんのホームページはこちら

- ▶ 蜀山女神、四姑娘 <http://www.sgns.gov.cn/scholaweb/conts.htm>
- ▶ ヒマラヤ横断山脈の女王谷 <http://www.sgns.gov.cn/scholaweb/queenvalley.htm>
- ▶ 四姑娘山図鑑 <http://www.sgns.gov.cn/scholaweb/flowers/flowerlist1-e.htm>

ご存じの方が多いと思うが中国山西省に、五台山という中国仏教聖地がある。普陀山、峨眉山、九華山と並ぶ中国四大仏教名山の一つで、ここは文殊菩薩が降臨し教えを広めたところとされて居り、日本からも古今の僧たちが多数訪れている。かつては300以上の寺が林立していたこともあるそうだが、今は、台内・台外併せて合計47ヶ所とのことだ。それでも高みから眺めおろすと、あれも寺、これも寺、あっちもこっちも寺だ。

いつだったか中国旅行の帰り、機内の乗客サービスの雑誌「中国民航」に、‘中国仏教聖地・五台山’という紹介記事があった。台懷鎮という寺の街を3000m前後の台状の五つの峰が取り囲む仏教聖地で、著名な寺々の華麗な写真説明の外、この五つの峰は、季節の花々が彩りハイキングもできると書かれてあった。当時、山歩きに夢中だった私はいつか歩いてみたいと心に決めた。

その後、‘わんりい’会員の岩田温子さんの紹介で、山西省中国国際旅行社の黄玉雄さん(現在副社長)が、山西省の観光スポットを毎号紹介くださるようになった。それを機に、岩田さんを通して五台山ハイキングを織り込んだ「五台山の旅」を計画して貰った。かくて‘わんりい’の女5人が、2002年の夏(少々旧聞だが)、五台山を囲む五つの峰すべてを巡る機会が訪れた。

今年(2012年)1月、‘わんりい’の中国語勉強会講師の郁老師が五台山を紹介する短文を読まれ、俄かに懐かしくなって古いアルバムを引っ張り出して眺めたりした。

今年もそろそろ、五台山を訪れる絶好の季節である。五台山ハイキングに行ってみようと思われる人が現れて、その後の様子などの報告を聞かせて貰えたら嬉しい。

▲南台(2485m)

五台山はまさに中国仏教の聖地だ。「佛教聖地五臺山」と書かれた台懷鎮入口のゲートをくぐってしばらく走ると極彩色に彩られた立派な寺が窓の外に現れては去ってゆく。五台山は中国で唯一の中国仏教聖地とチベット仏教(ラマ教)聖地が重なったところだそうで、街を貫く川に沿った道路を、五体投地で祈りを捧げながら進んでいる



南台からの眺望 手前は全面自然の花畑だ



南台山頂の寺・普濟寺 五台山の、それぞれの峰の頂上に寺があり、異なる文殊菩薩が祀られているそうで、南台は智慧の文殊菩薩と紹介されている。

チベット人巡礼の人達がいた。

五台山に着いた翌日、東・西・南・北に中台を加えた5峰の中で訪れる人が最も多いという南台に行った。頂上近くまで車で入れるが、歩くのが目的だからと車は山の中腹で下りた。車を降りると一面の色とりどりの夏草・秋草の豪華な歓迎である。タカネナデシコ、マツムシソウ、シオガマ、リンドウ、ノコギリソウ、ウスユキソウ、アザミ、ワレモコウ等々数え上げたらきりが無い。

車路から離れて緩やかな草原の中を思い思いに自由気ままに歩く。山西省の東北部のイメージは黄土に覆われた裸の山々が連なる黄土高原だが、目の前にはどこまでも緩やかな緑の峰々が連なり、夏の間は放牧地となっているとのことだ。草地なのにキノコも採れるらしく、観光客を当て込んで家族でキノコを売っていたりしていた。

五台山の各々の峰の頂には寺が建てられており、中国全土からの観光客が巡礼を兼ねて峰々を訪ねるそうだが、

中でも南台は、標高も低く、舗装はされていないが緩やかな山の腹を上るちゃんとした道路が頂上まで続き気楽に入りやすい。5峰を巡った後の感想では、花も花の種類も南台が一番多い。観光客が多いのもむべなるかなだ。

この日は、第一日目とあって季節の花々に嘆声を上げながらのハイキングだったが、頂上直下で突然雨が降り始めた。堂内の休憩所でお湯を貰い、黄さんが用意くださっていたカップラーメンで食事を済ませ下山を余儀なくされた。が、五台山ハイキングの旅最終日に車で再訪した。五台山ハイキングはどの峰も状況と脚力に合わせて車を使えるのがいい。再訪の時は快晴で、寺の前に沢山の屋台が出ていて菓草や仏具、アクセサリーなど売られていた。

▲西台(2773m)・中台(2894m)・北台(3058m)

翌日、今度は中台泊の予定で、西・中・北の1泊2日の行程で出発。黄さんがチャーターした車で途中まで行った。中台で用事を済ませ西台で合流するという黄さんと別れて、女5人、おおざっぱなコースの説明を受けて元気いっぱい西台に向かう。車も通れる緩やかな道を横切りながら登ってゆくので心配はないのだが、とはいえ、広大な中国の空の下だ。目指す頂上も見えない茫漠とした風景の中、私たち以外誰もいない。ふっと孤児になったような心もとなさを感じる。

突然、雷が大音響で鳴って俄雨が降ってきた。快晴と言えないまでも、ちょっと前まで穏やかに薄日も漏れていたというのである。雨は、この時は幸いなことにさしたる降りにはならなかったが、山の腹を上り詰め、霧の中はるかに霞んで西台の寺が見え、一足先に西台に到着し迎えに出ていた黄さんの姿を確認できたときは本当に嬉しかった！黄さんも思いも寄らない雷にかなり心配したようで、再会をお互いに喜び合った。前日の南台といい、この日といい3000m近い山の天気は変わりやすい。

時間は午後1時頃になっていて、昼食は西台の寺で、お坊さんたちが昼に食べたというお皿ほどの大きさの葱餅ツォンピンを温めなおしてくれた。

しばらく休憩して出発する。雨も上がってまあまあの天気になったかと思っただが、歩き出して間もなく再び崩れ、中台への道は小雨の中になった。高度も3000mに近くなり



西台で寺の昼食を頂く

足元は石がごろごろ転がるだけの悪路に変わった。雨はだんだん強くなり、午後4時をかなり回って中台の寺に入る頃には本格的な雨になり、雨具

から雨が流れ落ちるほどになった。季節は7月の末だが雨が降れば気温はグンと下がる。

五台山の頂上に立つ寺は、どれもコンクリート建築で城塞を思わせる。雨の中を歩いてやっとたどり着いてもあまり人のぬくもりが感じられなかった。しかし、中台の寺は、五台山めぐりの巡礼たちの人気の宿坊になっているらしかった。到着した時は、^{ひとけ}人気をあまり感じなかったが実際は大勢の宿泊客がいたことを後で知った。

通された部屋は、黄さんの計らいか、外国人の客だからか、一般の宿泊客と別室の部屋で、冷え切った体になんと有難いことか、ストーブを焚いてくれた。毛布も寒いだろうと特別に追加してくれたようだ。トイレが外にあるのを確認していたので、真っ暗い雨の中をトイレに行く難儀を予想したが、部屋の向かいが石炭保存部屋になっていてその奥にトイレがあった。やれやれである。

濡れたものを干し、寝床も整えて一息ついたところで食事の知らせが来た。長い廊下を歩き、案内された部屋には既に巡礼客が多数座っていた。

私はこの夜食べたものをすっかり忘れたが、五台山ハイキングの後、参加メンバーの一人である中村文子さんが寄稿下さった文章(2002年9月号)には下記のように書かれている。

『ここでの一番の関心事は、中国のお寺の食事です。案内された食事室にはローソクの明かりが灯された祭壇がしつらえてあり線香の匂いが漂っています。傍らに寺の高僧とおぼしき僧侶が座っておりますので、祭壇とその僧侶に無言で合掌し、いよいよ問題の食事を頂くのですが、その夜の食事は、野菜たっぷり、油たっぷりのウドンでした。翌朝は、おかゆと野菜炒めと漬物です。たぶん普通の農家の食事のようなものと思いますが、会話は禁じられていますので、葬式の最中のようなしめやかな雰囲気です…』

翌朝、雨は上がっていたが真っ白い霧に覆われていた。寺を出たところで、折よく牛飼いの男性に出会い、草原を

案内を頼んだ牛飼いの男性➡



クジラの背中のような草原に行く

進む道なき道のショートカットの案内を頼んだ。

牛飼いの男性と言ったが、広い草原には牛の影はない。牛はどこにいるんだろう。黄さんが聞き出した話では、預かっている牛の角には印があって、放牧地を回って牛がちゃんといるかどうかを確認しているのだそうだ。男性は時々鞭をピュッと打ち鳴らしながら、霧に覆われた、目印も何もない、ただ広い草原を確かな方向感覚でどんどん進んで行く。斜面は緩やかだが足の速い男性について行くのは結構キツイ。足元にはキク科の小さな白い花が一面に咲いている。乾燥させて枕に入れるとよく眠れると、牛飼いの男性が教えてくれた。きっといい香りがするのだろう。

ところで宿の僧坊の前にこの辺りのマップが描かれてあった。ふっと見たら今日のコースの途中で温泉マークの逆さクラゲが描かれてあるではないか。「五台山で温泉に入れる」と色めきたった。残念なことに温泉ではなく、五台山の守護神である文殊菩薩が天下ったところに池があるという印なのだそうだ。「人騒がせな印をつけないで欲しいわね」と言い合いながら、ついだからと立ち寄ってみると廃墟を囲んでいる感じで柵があり、その中に件の池があった。文殊菩薩の手形が付いたという石もあって、自分の手のサイズと比べたりして遊んだ。

天候は霧が晴れるにしたがって回復し、昼前に五台山の最高峰・北台に着いた頃には清々しい青空が広がっていた。北台の寺の、優しいお顔の文殊菩薩様に旅の無事を感謝し、黄さんが早々手配しておいてくれた車の人となり、あっという間に台懐鎮に戻りホテルで昼をとった。粗食を続けた後の昼食の何と美味しかったことだろう。午後は、折からお寺に奉納されていた山西省の地方劇をゆっくり楽しんだ。



◀ 文殊菩薩の手形と自分の手を合わせてみる

▶ 文殊菩薩が舞い下りたという池



眼下に流れ落ちる滝雲



荘厳な日の出を言葉なく見つめる

▲ 東台 (2795m)

ネットで五台山を検索していたら、

『東台(望海峰)からは雲海の上の日の出が美しく、西台(掛月峰)の上からは、秋の夜月見をするのが最高で、北台(葉鬮峰)の上からは、雪景色を眺めるのが美しく、南台(錦繡峰)の上からは、草木を鑑賞し、中台(翠石峰)は天体観測に最適の場所である』

とあった。5つの峰々を歩いてみると、まさにその通りと快哉を叫びたくなる。

五台山4日目は、'天気は運'と早朝四時に起きて真っ暗い中をチャーターの車で東台に向かう。道中は雲が多く、日の出の観賞は期待薄のようだったが、2800m近い山頂は垂れこめた雲の上だった。見渡す限りの雲海が広がって、目の前の峰を越える雲が次々と音もなく滑るように眼下の谷底に流れて落ちて行く。滝雲だ。滝雲を上から眺めたのは初めてだった。

雲の縁が色づき始め、真っ赤に染まると、チカリと光るものが見えた。日の出だ。寒さを堪えて日の出を待っていたそれまでの時間がウソのようにスルスルと太陽が雲海の上に昇り始め、みるみる空が明るくなっていった。眼下の滝雲といい、雲海を染めながら昇る太陽といい、荘厳且つ壮大な自然のドラマに目も心も奪われ誰も言葉を発しなかった。

(終)

カムーニャという男の子がいた。歳は、2歳か3歳くらいだった。お母さんの脚の後ろにぴったりとくっつき、離れないのが彼のいつものスタイルだった。カムーニャのお母さんは、義弟がお付き合いしている人で、彼女の連れ子だ。愛くるしく笑う彼には、生まれたときからすでにお父さんがいなかったらしい。カンバ族の出身で、底抜けに明るいお母さんの血を引いて、彼はちゃめっけたっぷりの男の子だった。

それに反して、義弟は家族で一番寡黙で、しゃべっている姿をあまり見たことがない。表情はいつもポーカーフェイス。そんな義弟に、カムーニャはいつもまつわり付いていた。新しいお父さんができるかもしれないことが嬉しくてたまらない様子だ。

カムーニャは、私を見つけるといつも私の服の端っこを引っ張って、指を口の中に入れてお腹をおさえてみせる。沢山のよだれが出てきている。それが「お腹がすいている」という合図と私が知るまでそう時間はかからなかった。いつ会っても彼はお腹がすいていた。指を口に含みながら、よだれが出ているのをいつも見かねていた。そして彼に会うと、近くにある屋台で、果物やお菓子を買っては彼にあげるようになっていった。その度に、かわいい微笑を浮かべるカムーニャ。その笑顔が本当に愛おしかった。

カムーニャのお母さんがある日、「うちの実家に遊びに来ない？」と誘ってくれた。カムーニャの生活状態が気になっていた私は出掛けて見ることにした。彼女の「実家のあるカジアド (Kajiado) という街までバスで一緒に行った。その街は、当時私が住んでいたところからモンバサ道路という幹線道路を一直線に南下していく。最終到着地は南アフリカというから果てしなくまっすぐの道路なのである。カジアドまでは、何もなしのサバンナをひたすらバスで走っていく。日本でも有名な牛の放牧民マサイ族の家がポツポツ点在しているのが車窓から見える。

30分も走れば景色は何もなくなり、1時間ほど乗車

していると突然現れる町、それがカジアドだ。町には、生活必需品を売る店、理髪店、金物店が数軒あるが、ここを通りすぎると家が点在しているだけで何もない。バス停から歩いてほどなく、カムーニャのお母さんの実家があった。玄関は建築中で木がむき出しになっていた。中の部屋もトタンを繋ぎ合わせただけの壁で、屋根からは光が漏れている。穴だらけなのだろう。カムー

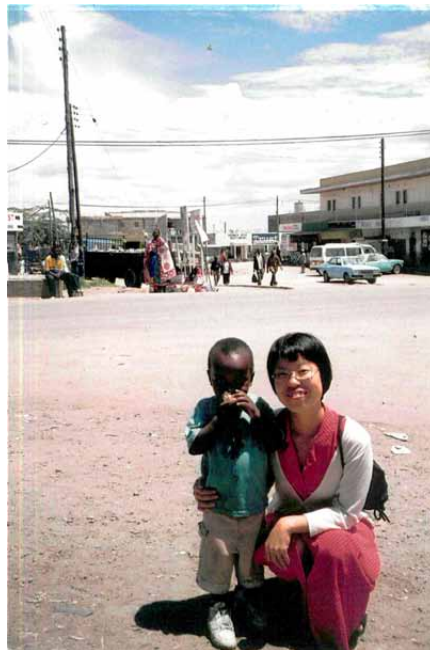
ニャのお母さんは、彼を生んだ後一度実家に帰って生活していた。そんな折、私の義弟と出会い、お付き合い始めたようだった。実家にはカムーニャのおばあちゃんがいて、その外にも沢山の家族がいた。しかし、男の人の姿が一人もなかったのが気になった。

その後、食堂へ出掛けた。聞けば、カムーニャのおばあさんは、離婚後1人で、子供達を育てたが、その子供達は結婚したが、みんな離婚して子供を連れて帰ってきてしまったという。家は、まさに子供と孫の集合体だ。細々と仕事をしているが、

みんなを養うのは困難という。歳にして60代くらいだと思われる顔と手はしわしわだ。彼女へずっしりとのしかかる家族の負担は、軽減することなく、小さい子供はどんどん成長する。女の人ばかりのこの家の家計は、僅かな希望さえないと嘆く。出された食事が味を感じないほど、だまって話を聞くしかなかった。ケニアではカムーニャが生まれた家庭のような働き手がない家庭は珍しくない。農業で生計を立ててはいるが、家族全員が食べるので食事は満足にほど遠い、やっとの生活だ。

食事の後みんなと一緒に町の中を歩いて回った。相変わらずカムーニャは、お腹がすいているのか、私にぴったりだ。私と目が合うとにっこり微笑む。家族ではない私にさえ笑顔を向ける彼の空腹の苦しみを感じた。

小さいカムーニャが身を持って私に教えてくれたのが、空腹と渇きの苦しみだ。その彼の空腹を知っていても、それに対して何もしてあげられないのは家族の苦しみでもあった。今でも、洋服の袖を小さく引っ張る彼



の小さな手を思い出すことがある。「何か食べさせなくては」と条件反射のように思ってしまう。あれから義弟とカムーニャのお母さんは結婚することはなかったの
で、ケニアの家族の中でカムーニャの話をするこ
とも聞くこともない。

彼は今12、13歳になっているはずだ。小学校には通っているのだろうか？ご飯は食べているのだろうか？その後のカムーニャのことを知りたいように思うと同時に知るのが怖いようにも思う。

今日本に住んでいて、食卓を家族で囲む時「さあ、感謝して食べようね」と6歳になった私の息子に言う。彼の答えは決まって「今、お腹すいてないもん」だ。ケニア人の血が流れている彼ではあるが、彼の生活も食べ物への関心もケニアの子供達とは全然違う。

「食べられること」に感謝している。そして「食べさせることができること」に感謝している。ケニアから帰国し子供を持ってきて、カムーニャと関わったことが私に大きく影響しているのを感じる。

ぼくが見て感じたスリランカ紹介 58

かこ 囲われ料理人

赤岡健一郎 (日本スリランカ武道協会
日本スリランカ文化交流協会)

世界各国にある日本企業では、同じ企業内で代々引き継いで雇っている料理人が多数います。この人達を僕は「囲われ料理人」と呼んでいます。

スリランカでも、ここ二十数年間の国内事情によって日本人駐在員の生活形態が変わってきたので数は減っていますが、この様な「囲われ料理人」は今でもいます。僕が駐在していた時には商社や建設会社には必ずと言っていいほど、和食でも洋食、中華でも何でもござれの達者な包丁さばきの料理人がいました。これだけでは大使館付の日本人料理人と大差無く特別な事でも無いようですが、実はこの人達はみんなスリランカ人だったのです(奥様は魔女風の発音で)。

代々の所長さん達が後継者と業務の引き継ぎを行うのと同じように、料理人が引き継がれていました。この人達は会社に雇われていると言うよりは、個人との繋がりで雇われていると言った方が正確でしょうか。何故かと言うと、この人達の給料は相当に高額です。国立大学を出たエリート役人よりも高額な場合もあるようなので、社内のスリランカ人職員の給料とのバランスが取れず軋轢になるからですかね。今日はどここの所長の自宅に招待されているので料理が楽しみだとか、あそこの料理人は今一だとか内心で考えていたものです。

僕の会社の場合にも、スリランカ南部にあった水力発電用のダム工事現場の食堂と厨房を仕切っていたラネさんという男性料理人がいました。現場の食堂とはいっても最盛期には協力会社の職員を含めて日本人職員が約60名、英国人を初めに様々な国籍の職員も50～60名程度いた大所帯です。もちろん、この他にも数百名のスリランカ人職員もいました。

ラネさんはこのダム現場の所長が、現場が変わる度に一緒に移っていました。一度などは、所長が他国に転勤した際に中東のホテルに転職していたのですが、数年後にこの所長がスリランカへ再赴任した時にはラネさんの就職先を探し出して、呼び戻した事がありました。所長が他国に転勤するときに、呼び戻すことを言い含めておいた訳です。

ダム工事の現場は工期が5年以上と長い上に、立地的にも人里離れた山間部、家族帯同の職員はよいのですが、単身赴任者にとっては仕事の他には寝る事と食べる事ぐらいしか楽しい事はありません。様々な国籍の職員の士気を持続させるためにも、それぞれの味覚に合った美味しい食事で職員を満足させる事の出来る、腕の良い料理人は必要不可欠です。

此処のダム工事現場は規模が大きかったので、工事現場で働く人たちの住居及び付随する建物をいれると一つの町の様でした。家族帯同職員の為には一戸建ての社宅、単身赴任者には24時間冷房完備・温水給湯バス・トイレ付の個室が与えられていました。大小の事務棟や会議室、病院、日本から教員を呼んだ学校、日用品を扱う商店、ゲスト用の宿泊設備。娯楽施設としては、体育館やグラウンド、プール、テニスコート、屋外劇場などが揃っていました。セキュリティもしっかりしていたので、コロombo日本人学校の修学旅行先としても使われていました。奥様方には週に何便かのコロomboへのお買いものバスツアーも用意されていました。

ダム工事が終了した現在は、単身者用住宅はこのダムの統括官庁である電力省のVIP用ゲストハウス、その他の施設はスリランカで一番新しい国立大学の校舎として

活用されています。これだけでも付帯設備のスケールの大きさが判りますね。

ラネさんの働いていた食堂棟も凄い設備でした。全職員が家族と共に集まるクリスマスパーティ等の親睦会もしばしば行われるので、それに見合った広さのダイニングルーム。日本人と外国人職員が仕事から解放された後に心の緊張をほぐす為のラウンジ付のバー、玉つき台、カラオケ等ありました。厨房もそれなりに広く、冷凍庫だけでも6～8畳位はあったでしょうか。此処に日本から送られてきた食料品、コロンボで調達した食料品等が山積みされていました。

何と贅沢な、と思われるかもしれませんが、前述したような理由で食生活は充実していなければいけません。ダム工事の最盛期には24時間ノンストップで工事が行われます。職員は2交代、あるいは3交代で働き、その合間に手が空いた者から食事を摂るので、食堂も24時間営業です。ラネさん一人で全ての調理ができる訳もなく、ラネさんの数人の助手が交代で調理を手伝います。助手達はラネさんから調理技術を学んで腕を磨き、囲われ料理人やホテルのシェフ、日本食レストランのオーナーシェフとなっていきます。

ラネさんの何が凄いのかを話しましょう。日本から議員・役人さんやらの視察団などが現場に来ると、必ず歓迎パーティが催されます。この時にはラネさんは前夜の

うちにコロンボに行き、早朝に行われる魚市場の競りで大きなロブスターやインドマグロを一本まるごと競り落とし、急いで現場に戻りお刺身を作ったり寿司を握ったり、ロブスターなんかは生き作りにして宴会に出して客を驚かせます。他国からの客に対しても同じように客に見合った料理を出していました。こんな仰々しい料理ばかりではなく学校の運動会等では、ちらし寿司や海苔巻、お稲荷さんを用意したり、子供達のお誕生会には辛くないバーモントカレーや茶碗蒸しを用意したりもします。ラネさんが何処で日本料理を習ったのか聞いたことがあります。答えは、若いころにスリランカに駐在した日本人の奥様達から教わったそうです。

数百名いたスリランカ人職員にはラネさんの料理よりも、工事現場のゲートの外に朝から晩まで地元のオッチャンやオバチャンが出店しているキャンティーン(屋台または一膳飯屋)のカレーの方が口に合っていたようです。僕も何度かキャンティーンのカレーを食べました。最初は美味しく食べられるのですが、四～五口食べると辛さが勝ってきて、頭髪の中から汗が噴き出してくる始末です。ラネさんの料理も懐かしいし、キャンティーンで食べたカレーも忘れられない味です。余計な話ですが、キャンティーンを出店するためには、出店するための審査があるそうです。出店料だけでなく味(この場合は辛さかな)も審査対象みたいでした。

松本杏花さんの俳句

「千里同風」より

梅天や峰峰墨絵のごとくなる

rùnrùn méi yǔtiān
潤潤梅雨天

chóng luán diézhāng fēn/fèn nóngdàn
重峦叠嶂分浓淡

shuǐmòhuà yībān
水墨画一般



季语：梅雨天，夏。

赏析：这幅还散发着墨香的山水画卷展现在我们面前，真是美的享受。梅雨天的湿润与峰峦叠峰的浓淡，在作者的生花妙笔之下表现得淋漓尽致，给人一种亲临其境之感。

一面の馬鈴薯の花赤い屋根

xiá ěr yīlǎn tǒng
遐迩一览统

mǎlíngshǔ huā mǎnmù míng
马铃薯花满目明

gèng zhuó wū chūnhóng
更着屋春红

季语：马铃薯花，夏。

赏析：进入东北地区，方能领略地大物博的含义。一望无际的马铃薯花，有白色的，有粉红色的，竞相开放，斑斑点点，蔚为壮观。在这花丛中，若隐若现的是鲜艳夺目的红色屋脊，它起到了画龙点睛的作用，使大自然的美景更加生机勃勃了。

ディープなアジア映画鑑賞 ①

—シンガポール映画を初めて見る—

為我井 輝忠

去る5月12日から20日まで東京六本木で「Sintok 2012シンガポール映画祭」が開催されました。これまでシンガポール映画を見たことはほとんど無きに等しい状態だったので、ぜひ見たいと考え前売り券を購入しておきました。映画祭は今回で2回目。1回目は2年前にあったそうです。今回の映画祭を通して幾分かシンガポールの今を知ることが出来そうです。かなり多くの人でにぎわい、特に若い人々が多いのには驚きました。

上映作品は15本あり、その中から2本を選び、見るのを楽しみにしていました。本当はもっと見たかったのですが、これ位が限度でした。ともあれ1本はシンガポールで一番人気があるというロイストン・タン監督の「12Lotus」、もう1本は新進気鋭のブー・ジュンフォン監督の「Sandcastle」です。どちらも中国系監督の作品なので、シンガポールに住む中国系の人々の考えや生活を知ることが出来るのではないかと考え、選んでみました。また、タン監督はすでに日本でも「881 歌え!パパイア」(2007年)の公開で、かなり知られてた監督であり、シンガポールの今を代表する映画監督です。

「12Lotus」は、歌台(ゲータイ)のスターを夢見た少女の物語。父に仕込まれ、苦難と悲しい運命に耐え、福建歌謡の名曲12曲「12蓮花」の歌詞になぞらえ、非情な男に翻弄される女の人生を描いたミュージカル・メロドラマです。今回の映画の舞台となったのは「歌台」というもので、かつてのシンガポールではどこにでも見られたものです。しかし、今はあまりないようです。旧正月や旧盆の時に街角に野外舞台が建ち、京劇が掛かるのを見たことがある人もいると思いますが、歌台は京劇でなく歌を専門にした舞台です。もっぱら中国南方、(特に福建地方)の民謡や歌謡を行い、絶大な人気を誇っていましたが、時代と共に今ではもう少なくなっていました。そんな古き良き時



映画祭のポスター



「12Lotus」のロイストン・タン監督と主演女優の劉玲玲さん

代のシンガポールを垣間見ることが出来ました。

「Sandcastle」は、祖父母との交流を機に亡き父の過去、そして、シンガポールの消された歴史を知り、大人への道を歩みだす18歳の青年の物語です。映画の背景には、シンガポールがマレーシアから独立した後大きな政治的な動乱と共産主義を排除した時代を描き、映画からそうした時代の背景を知ることが出来たと言ってもよいでしょう。

今回、2本の映画を見ることが出来、この国を知る上で大きな収穫でした。それとともにロイストン・タン監督と「12Lotus」の主演女優・劉玲玲さんに直接お会い

できたことも言葉では言い表すことが出来ないほどの驚きでした。映画上映の後、2人の挨拶とオープニングパーティがあり、話をしたり、彼らの歌をきいたり、またシンガポール料理を堪能したりと、有意義な一夜を過ごすことが出来たことは大きな収穫でした。

使用済み古切手と書き損じの葉書でご支援を!

日本スリランカ文化交流協会では、スリランカへの教育支援の為、使用済み古切手と書き損じの葉書を集めています。古切手は周りを1cmほど残して切り取り、おついで折に「わんりい」の事務局にお届けくださるか、田井にお渡し下さい。

「中国が笑う日本の資本主義」というタイトルは、日本が資本主義として機能しきれてない官僚主義国家である、ということの表現。さらに本書では、日本の政府・官僚社会の問題点を挙げ、対策を述べている。では、誰が、いつ、その対策を実現させるのか。

私は、社会人の最初の6年間は営業職だったが、本当によかったと思っている。なぜなら、「お金を持ってくる大変さ」を、身を持って知ったから。

今は事務職として働いているが、同じ課で働く10歳下の女の子の甘さに不安を覚える。「お金を持ってくる大変さ」を知らないゆえの、仕事の甘さ。お金を払う人に対して、申し訳のない働き方はできない。自分の働き方が対価に見合っているか常に問うべきだと、自身は思っているが、伝えるのは難しい。

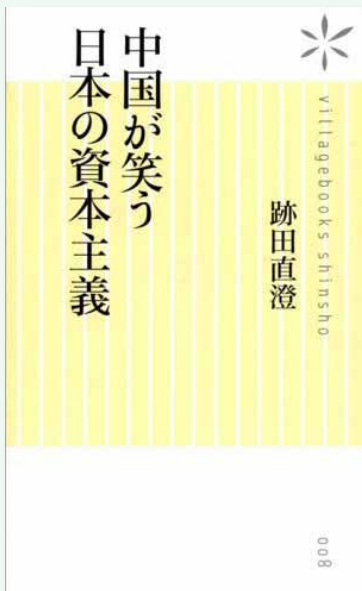
昨年まで一緒に働いていた同僚は、「事務職は結

局、現場を支えることしかできない。だから、現場を知らないといけない」といって、あえて異動していった。彼女は事務職としてもミスなく仕事をこなす、プロフェッショナルな人だった。プロとは常に上を向いているものらしい。

民・公に関わらず、組織の問題点に敏感で、対策に積極的な人はいるし、その逆の人もいる。ただ、違いがあるとすれば、「お金を持ってくる大変さ」を知っている人が多いか、少ないかだと思う。

日本の借金が1千兆円を超えて、対策が必要なのはわかっている。ただ、その対策を実現させるには、どうしたらいいのか。税金で賃金を支払われているすべての人が、「お金を持ってくる大変さ」について実感を伴って知っていれば、解決はもっと早いと思うのだけど。

(真中智子)



《'わんりい' 掲示板》

◆わんりいの催し

第10回 中国語で読む・漢詩の会

漢詩は音楽です。「漢詩を中国語で聴き、中国語で朗読する」ことを目指します。中国語を勉強されていらっしゃる皆さんも、詩の背景や作者を知って、中国語による詩吟として楽しんで見るのは如何!? 皆様のご参加をお待ちしています。

- 場所：まちだ中央公民館6F・第3学習室
町田市原町田6-8-1
JR 横浜線町田駅ルミネ口2分/小田急線南口5分
- 月日：2012年6月10日(日)
- 時間：4:00 ~ 15:30 (講座は午後です)
- 講師：植田渥雄先生 (現桜美林大学孔子学院講師)
- 会費：1500円 ■ 定員：20名
* 録音機をお持ちの方はご持参下さい。
- ◆ お申込み： ☎ 050-1531-8622 (わんりい)
E-mail: ukiuki65jip@yahoo.co.jp



日中国交正常化40周年記念公演
楽隊による生演奏による 京劇「三国志」
~古城会~ 関羽千里行より

2012年8月4日(土) 開演 18:00 (開場 17:30)
世田谷区・玉川區民会館ホール
東急大井町線「等々力」駅下車徒歩1分

〈出演〉
関羽：張春祥、張飛：殷秋瑞、劉備：侯偉
馬童：馬征宏、蔡陽：張冠玉 他 司会：張烏梅
〈楽師〉 洪剛(鼓師)、許佳、錢騰浩、金虹、関潔沁
〈京劇レクチャー〉：加藤徹 (明治大学教授)

参加費：
一般：5,300円
世田谷区民：4,800円
高校生以下：2,000円
※当日券は各500円増

▲チケットのお申し込みは
いんしゅうずい 殷秋瑞さんへ

☎ 042-736-9033 (夜間)
携帯：090-9342-4827



〈チベットの人たちに会いに行きませんか〉

～6歳のときにヒマラヤを越えて、チベットから亡命した少年の物語～



映画『オロ』 <http://www.olo-tibet.com/>

6月下旬より上映

前売り鑑賞券：1400円

渋谷・文化村前 交差点左折

於：ユーロスペース

<http://www.eurospace.co.jp/>

渋谷区丸山町 1-5 ☎ 03-3461-0211



子育てが一区切りしたころ、山歩きにのめり込んだ。その行き着く先はヒマラヤで、万年雪を頂く世界の屋根を一目見たいと、友人と2人でネパールへ行き、すっかりネパールに魅せられた。

以来10年間ほど毎年のようにネパールを訪れては、トレッキングをしたり、カトマンズ盆地のあちこちの街を歩き回ったりした。そして、チベット難民の人たちに出会った。難民キャンプで、歌を口ずさみながら、野生動物やヒマラヤの図柄を絨毯に織り込む若い娘たち、トレッキングの路上で、自然石を彩りよく繋いだアクセサリーを売る親子…。ネパールに行くようになるまでは、チベットは雲上にヒトが住む所くらいのお粗末な知識しかなかったが、その後チベット圏に行く機会も何回かあったりして少しずつチベットやチベットが抱える深刻な問題を知るようになった。

皆さんもご存じかと思うが、インド北部のダラムサラには、1959年に指導者ダライ・ラマ14世が亡命し、チベット亡命政府が置かれた。この亡命政府が運営する「チベット子供村」に寄宿して学ぶチベット少年・オロを主人公にした映画「オロ」が、6月下旬から渋谷のユーロスペースで上映される。

監督は、1934年生、岩波映画出身の映画作家・TVディレクターの岩佐寿弥^{ひさや}、78歳。ドキュメンタリー映画だが、チベット問題、ダラムサラについての解説も、映像を説明するナレーションもない。映画撮影されているオロの姿や、監督自身がオロと旅をしたりする、ドキュメンタリー映画としては異色だ。画面に映るのは6歳の時、「しっかり勉強するんだよ」と母親に背中を押されて、チベットか

ら家族と別れて只一人で亡命してきたオロであり、オロと関わりのある一握りの家族たちの日常だ。

映画は、ダラムサラで学ぶ子供達やネパールのポカラ難民キャンプで暮すチベット人たちの、明るい笑顔や飾らぬあるがままの姿を映す。彼らはどのショットでも生き生きと表情豊かだ。まるで自分の身近な親・兄弟のような懐かしい雰囲気があり、自分も映画の中で一緒に語り合ったり歌を歌いたくなる。ポカラの難民キャンプでオロが出会う、チベットの民族衣装をまとった難民一世のおばあちゃん・モウモ・チェンガの存在感には圧倒される。

そしてオロとモウモ・チェンガおばあちゃんの手が重ねられ握り合う、その映像がアップで映し出される。チベット問題について何も語らない映画が語る、言葉以上のメッセージを感じる映像だ。感動的であり且つ美しい。重ねられる老若の手に、オロの母親が、まだ6歳というたいけない年齢のオロをひとりヒマラヤを越えてダラムサラに亡命させた母親の気持ちが分かるように思った。人は限りある命を生きながら、辛く悲しい事があっても、いつも次世代に自分の願いや思いを託してきた。東日本大震災の被災者たちも、いや私たち自身も、モウモ・チェンガおばあちゃんと、その思いは同じだ。だからこそ、私達は、次世代、次々世代の幸せを見据えて今のあるべき姿を真剣に考えたい。

この映画を見た人は皆、きっとチベット民族の人々が文句なしに好きになると思う。そして、チベット問題は自分たちと同じフツウの人たちが余儀なく出会った問題だと気が付くのではないだろうか。映画の主人公・オロは、口元が引き締まった端正な顔立ちの、好奇心で目がキラキラ輝いている少年らしい少年だ。だが、時々ふっと哲学者のような表情になったりする。

チベットに関心のある人は勿論、チベットを遠い世界と思っている人達も是非、オロに会いに行きたくて欲しいと願っている。私も又会いに行くつもりだ。 (田井光枝)



オロとモウモ・モチェンガおばあちゃん

町田国際交流センターの活動を知ろう！

町田国際交流センターの活動紹介オリエンテーションと外国人サポーターによるティーサロンを開催します。国際交流に関心のあるあなた、是非ご参加を！

6月30日(土)町田市民フォーラム4F
場所：町田国際交流センター 講習室他

第1部:午後1時～午後2時30分

「町田国際交流センター活動紹介とボランティア部会の活動を知ろう！」

- (1) 町田国際交流センターの活動紹介
- (2) ボランティア部会の紹介
外国語部会 / 国際理解部会 / 交流部会
国際協力部会 / 日本語教室部会
外国人相談部会 / 広報部会

第2部:午後3時～午後4時30分

「外国人サポーターによるティーサロン」
～外国人の方とお茶を飲みながら交流しよう！～

対象：高校生以上の方

費用：無料

☆問い合わせ：町田国際交流センター
☎042-722-4260
町田市原町田4-9-8 町田市民フォーラム4F

- ◎(財) 町田市文化・国際交流財団町田国際交流センターは、2004年4月に町田市の地域文化と国際交流の振興を図り「文化の薫り高く国際感覚豊かなまちづくりに貢献する」ことを目的に発足しました。当センターの事業の担い手はボランティア会員の方々によって運営されています。

常磐山文庫名品展 特集「米色青磁」

南宋皇帝ために焼かれた稲穂色の官窯青磁。我が国にのみ存在する4点の内3点を所蔵する常磐山コレクションを、その拠りどころとなった米内山陶片とともに紹介する。(同封チラシを参照ください)

5月31日(木)～7月1日(日)(月曜日休館)
9:00～16:30(入館は16:00まで)

◆会期中毎週土曜日13:00より、担当研究員による列品解説があります。

会場：鎌倉国宝館(鶴岡八幡宮境内)

一般入場料：300円 小中学生：100円

問合せ：文化財部鎌倉国宝館 ☎0467-22-0753

[6月の定例会と7月号`わりりい'発送日]

- ◆定例会：6月11日(月) 13:30(田井宅)
- ◆おたより7月号発送日：2012年6月29日(金)です。
～どちらも、お問合せの上ご自由に参加下さい～



シリーズ“シルクロードの旋律を奏でる”其の五
絲綢之路(シルクロード)～二胡×揚琴×ピアノ～
2012年6月30日(土)14:00開演 / 13:30開場
横浜市岩間市民プラザ・ホール

曹雪晶(二胡) / 林敏(揚琴) / 西音あき子(ピアノ)

二胡の名曲からクラシック・ポピュラーまで、独奏やアンサンブルでたっぷり聴かせる悠久のプログラム！

▶予定曲目：

- ♪「万馬奔騰」(戦馬奔騰) ♪「秦腔主題随想曲」
- ♪「龍船」 ♪「空山鳥語」 ♪子守唄シリーズ
- ♪「絲綢之道/シルクロード」♪「青花瓶(inst ver.)」
- ♪「亡き王女のためのパヴァーヌ」 他

▶入場料：2500円(全席指定、177席)

▶申込み：横浜市岩間市民プラザ ☎045-337-0011

※残席僅かです。参加ご希望の方はなるべく早くお申し込みください。

下記の本に関心をお持ちの方に無料で差し上げます

出来るだけ手渡しとしたいですが、遠方の方には郵送でお送りします。その場合の送料は着払いでお願いします。

●連絡先 岩田温子 ☎042-736-6642
〒195-0061 町田市鶴川4-13-11
e-mail:huixiang@excite.co.jp

- 1)「北京—世界の都市の物語」 竹内実著、文芸春秋社刊
- 2)「トラが語る中国史—エコロジカル・ヒストリーの可能性」
上田信著、山川出版社
- 3)「北京の思い出 1926—1938」
アイダ・プルーイット著、山口守訳 平凡社
- 4)「中国の環境危機」、パーツラフ・シュミル著
丹藤佳紀・高井潔司著 亜紀書房(1996年刊)
- 5)「中国の環境問題」中国研究所編 新評論(1995年刊)
- 6)「私は「蟻の兵隊」だった—中国山西省に残された日本兵達」
奥村和一・酒井誠著 岩波ジュニア新書
- 7)「ある日本兵の二つの戦場—中国・山西省から沖縄へ」
内海愛子・石田米子・加藤修弘編 社会評論社
- 8)「北京廟会旧俗」、中華本土文化叢書、郭子昇著
- 9)「中国民間玩具簡史」、王連海著 北京工艺美术出版社
- 10)「中国曲芸史」、蔡源莉・呉文科著 文化美術出版社
- 11)「中国戯曲曲芸詞典」 上海辞書出版社
- 12)「中国梆子戏 劇目大辞典」 山西人民出版社
- 13)「山西劇種概説」 山西人民出版社
- 14)「山西戯曲折子戲荟萃」 中国戯曲出版社
- 15)「晋劇文場芸術」、兼論田九雲・牛巧珍師徒、張林雨著
人民音楽出版社